

日本の里地里山30応募者データ表

団体名 森林塾青水

代表者名 清水英毅

連絡先住所

〒102-0094 東京都新宿区西新宿1 - 23 - 7 新宿ファーストウエスト5階

扶桑レクセル(株) 監査役室気付

電話 03(3345)1390 FAX 03(3345)7471

E-mail sinrinjyuku@fiberbit.net

HP <http://www.fiberbit.net/user/sinrinjyuku/>

事務局スタッフ(常勤 0名/非常勤 4名) 会員数 56名

管理活用を行っている里地里山の所在地

群馬県利根郡水上町大字藤原字上ノ原6152 - 24他

日本の里地里山30 保全活動コンテスト 活動概要 様式

ふりがな	しんりんじゅく せいすい		
団体名	森林塾 青水		
代表者名	清水 英毅	電話番号	03 - 3345 - 1390

[環境状況]

地域の自然環境の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・活動地域は利根川の源流部、武尊山(2158m)山麓に位置し、一帯には武尊山の火山噴出物が分布している。標高は1050~1200m、比較的ゆるやかな地形の場所にある。中央部分を、背後の山塊を湧水源とする「小川」が流れ、季節によっては一部が伏流水化する。 ・気候は、冬期の積雪が2mを超える典型的な日本海型。冷温帯に属し、ブナを主体として、それにオオバクロモジやマルバマンサクなどが混じる森林植生域と考えられるが、現在は全域が二次植生化している。21ヘクタールの活動地域のうち、約半分がカエデ類を多く交えたミズナラ林、残り半分がススキ草原となっている。 ・ススキ草原は森林化が進行中で、タニウツギ、バッコヤナギ、コマユミ、シラカバ、ケヤマハンノキ、ミズナラなどが侵入している。 ・一方で、ナンバンギセルやオミナエシなど、草原性の草本植物も見られる。また、群馬県産の鱗翅類の70%以上がこの地域に生息しているとの報告もあり、草原性の生物相の豊かさに特徴がある。
地域の伝統的な自然との関わり方、生業や生活の歴史、文化	<ul style="list-style-type: none"> ・森林資源に恵まれた地域だが、いわゆる「育成林業地域」ではない。国有林、炭焼き、天然林材の伐採、木材チップ生産などが、戦後の高度成長期までの地域の人たちの森林との経済的にかかわりだった。また、大規模ダム、スキー場、キャンプ場、ゴルフ場開発など、森林空間開発との関係で森林に関わる歴史も続いた。 ・天然の森林資源を利用するとともに、集落周辺には広大なススキ草原と雑木林が広がり、里山としての利用がおこなわれてきた。ススキ草原は、基本的には屋根の葺き替え用のカヤ場として、入会利用と管理がおこなわれてきた。周辺の雑木林一帯では炭焼きや、「カンノ」と呼ばれる焼き畑がおこなわれていた。 ・ススキ草原ではワラビやハギも重要な産物だった。ワラビ糊は桐生などへ出荷し、ハギは馬の飼料などに利用され、採取時期の規制もおこなわれていた。 ・また竹林が生育しないため、屋根葺きや日常の生活用具などに、竹にかわって雑木を利用する工夫が発達している。

[活動状況]

<p>活動開始時期</p>	<p>2000年9月発足</p>
<p>きっかけ、経緯</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・坂東太郎利根川の流域で活動する木工芸作家と都市住民・森林ボランティアが、群馬県水上町の水源の森に集まり、発足。森が育む木と水の文化を愛し、源流域の里山の景観を大切にし、先人が自然との関わりを通して培った暮らしの知恵に学び、それらを現代に継承し活かそうと始まった。 ・2001年ワークショップと自然観察会、源流遊行、木工教室「樹種見本」の作成と木作品展 ・2002年9月現代版「入会慣行」を考える集いを東京で開催、学習会と交流会、10月水上町で開催、現地フィールドスタディ ・2003年4月元・入会地であった町有林21haの土地賃借契約締結
<p>活動の目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近代まで続いた入会慣行という先人の知恵に学び、現代の荒廃しつつある里山（特に源流域の奥里山）生態系、並びに日本人の心の原風景とも言うべき里山景観の持続的保全活用を図る。 ・併せて、過疎化しつつある集落を地域丸ごと博物館として、住民参画・交流型の地域振興・活性化に貢献する。
<p>活動内容</p>	
<p>保全・維持管理活動</p>	<p>グランドデザインの策定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゾーニング別の管理・育成方針、遊歩道ルート・主要ポイントの策定 ・フィールド整備中長期計画の策定 案内看板、標識、境界杭の設置 ・デザイン、内容の確定と施工費用、実施方法の検討 ・フィールド整備計画に基づき地元と協働で整備 管理道路・遊歩道、水飲み場の整備 ・デザインの確定と施工費用の検討 ・フィールド整備計画に基づき、地元と協働で整備 ・自然素材を用いた古来の施工方法により整備 茅場の育成 ・茅の育成・管理方法と、年間スケジュールを策定 ・計画的な茅刈りと野焼きの実施 ・山の口開け・終い時に清掃活動 ・茅場の森林化抑制のために雑木の伐採

<p>普及啓発、 環境学習、 調査活動等</p>	<p>1) 現代版「入会慣行」の発信と実践 (普及啓発)</p> <p>現代版「入会慣行」(初版)の発刊とパブリシティー 山の口開け・終いの復活 茅の輪くぐりと清掃活動の実施〔地元婦人会、児童会、等と協働〕 計画的な茅刈りと野焼きの実施 案内看板による訴求 その他、日常活動の中での率先垂範</p> <p>2) 特色ある事業活動の開発と展開 (環境学習)</p> <p>オリジナルプログラム「森林塾自然ふれあい学習プラン」の開発と実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独自のプログラムメニューの作成(キノコ狩り、山菜取りと料理、薬草採り、草木染めお茶づくり、野点、ほうき作り・茅刈り・茅編み、イヤゲームなど) ・フィールドを散策し、ゆったり楽しく学ぶプログラムを実施 ・麗澤中学校など学校・団体等の環境学習を受託 <p>タイアップ講座「森林コモンズ村」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動フィールド(カヤ場、雑木林)と地域集落空間をまるごと活用し、地域の人材とともに資源調査や保全作業、里山保全の方向性などを考える講座の開催 <p>3) フィールド・藤原集落の掌握強化 (調査活動)</p> <p>上ノ原の森のフィールドスタディ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二次林(ミズナラ林)把握のための毎木調査 ・ススキ草原の森林化の現況把握のための毎木調査、樹種別樹齢調査 ・鳥類、昆虫類、ほ乳類などの観察と生息リストづくり ・フィールドの自然の年間モニタリング(写真記録も含め) ・バイオマス調査、火入れの影響調査、植生図作成など <p>藤原地区フィールドスタディ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藤原地区の路上観察会 ・古老・婦人・田園構想委員のヒアリング、交流会
<p>活動頻度・参加人数</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2003年度は、6回現地にてフィールドワークを行い、延べ人数150名が参加した。 ・環境学習受け入れとして、麗澤中学1年生を125名受け入れた。 ・5月に開催された森林の市でブースを借りて、茅編み体験、木工品販売などによる広報活動を行い、2日間で延べ20名が手伝った。 ・幹事会は月1回の割合で4～6名が集まり、学習会(東京)は、4回開催して、延べ80名が参加した。

<p>主な活動メンバー</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主たる構成メンバーとしての都市住民は、環境学習の指導者、会社員、主婦、学校関係者、行政、マスコミ、建築設計、コンサルタント等、多様な属性である。 ・地元の構成メンバーは、木工家、民宿経営者、など地域住民と、水上町役場の農林建設課、環境保全課などの職員である。 ・協賛会員として麗澤中学と水上町がメンバーとなっている。
<p>活動展開体制の状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・水上町とは、町有林である21haのフィールドを賃借契約し、現在町で進めている田園空間整備事業のグリーナリズム戦略委員に3年間、会員の中の15名が任命され、担当課とは連携して活動を実施している。 ・地元藤原地区とは、民宿組合に食事メニューの提案、田園構想委員会と休憩棟の検討、古老からは昔の里山との係わりなどのヒアリング、茅刈り、茅葺き、雪掘りなどの指導を受けている。 ・フィールドワークの時に、地元NPOや主婦団体に協力してもらっている。
<p>今後の目標と課題</p>	<p>1) 自然環境の保全上の目標と課題、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動フィールドは、二次林（ミズナラ林）と二次草原（ススキ草原）からなる。二次草原部分については、森林化を止め、ススキ草原を再生して維持していくことが目標。手法としては、「木本類除去」「火入れ」「ススキの刈り取り」の3つを試していく。 ・「二次林」部分については将来の姿の青写真ができていない。二次林の将来の「形」を見いだすことが今後の目標と課題。現時点では、二次林の現況把握に力を入れ、目的のない「手入れ」はせずに現状を「見守る」。 ・いずれにしても、可能な限り生態学的な知見を得ながら、植生管理をしていくことが課題。現在ススキ草原への「火入れ」を試みているが、この手法のみにこだわることなく、順応的に管理をおこなっていく。 ・また、ススキを茅葺き材料として販売する、といった「利用」の仕組みを確立することが課題。これは二次林部分についても同じで、「利用＝保全」の循環管理システムの構築も課題としたい。 <p>2) 体制整備上の目標と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動年数が少ないため会員数も少なく、実働スタッフ不足であるため、活動の展開を図っていきたいが、スタッフ不足のため限られてしまう。そのため、組織・推進態勢の拡充が必要であり、事務局スタッフならびに幹事会の拡充、ネットの整備、NPO法人化の検討・準備も目標としている。整備・茅場の育成活動を通して、人材の育成が行われ、新たな参加者の中から、今後の活動の中心となる人材の発掘が行われ、活動を活性化させる。 ・地元水上及び藤原の住民の参加がまだ少なく、都市住民主体では、交通費の負担が大きく、あまり活動の拡充が期待できないが、都市住民の参加者拡大により、地元住民の奥里山の保全活用意識が醸成し、地元住民の活動が促進され、地域貢献に役立つことが望まれる。

今後実施したい活動	<ul style="list-style-type: none"> ・茅や森林資源を利用したミニ簾、などの工芸品他の商品化検討と製作、茅と森林資源の新たな有効活用策の研究と販路の確保を図る。 ・他団体との連携を図りながら、地域交流・連携、フィールドの保全・活用、地域文化の展開・活用活動の人材育成を図る。 ・フィールド周辺及び藤原地区の自然、景観、文化、歴史、などの地域資源を見直し、エコミュージアム（地域丸ごと博物館構想）構想として地域資源を保全・活用、又、エコマネー（地域通貨）等をシステム構築し地域活性化を図る。
-----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

添付資料リスト

1. 写 真
2. 地 図
 - 群馬県における位置図
 - 水上町フィールド周辺図
3. 活動資料
 - 森林塾青水リーフレット
 - 森林塾青水会則・役員名簿
 - 2003 年度事業計画書
 - 2004 年度事業計画書
 - 会報誌 4 号から 8 号
 - 「森づくりフォーラム」NEWS98 掲載

群馬県における位置図

